

## 2022年10月2日(日) 「バビロンからの帰還」

聖書箇所：エズラ書1：1-11

暗唱聖句：上って行くがよい。神なる主がその者と共にいてくださるように。（歴代誌下36:23）

今週からエズラ記を学びます。著者のエズラは、イスラエルの神なる主が授けられたモーセの律法に詳しい書記官であり、その神なる主のみ手の加護を受けて、求めるものをすべて王から与えられている人でした（7：6）。

紀元前538年、ペルシャのキュロス王はバビロニアを征服しました。かつて統治していたアッシリアは強制移住や重税など過酷な支配を行いました。そのような政策は諸民族の反乱を招き、アッシリアは4つの国に分断されます。その後、バビロニアを統一し、支配したのがアケメネス朝ペルシャのキュロス王です。アッシリアを反面教師として、寛容な統治を行いました。その一つとして、それぞれの民族の伝統を尊重し、宗教の自由を認めたのです。

キュロス王の最初の事業は、バビロン捕囚によって連れてこられたイスラエルの民を帰国させることでした。しかし、これは、キュロス王の考えで行ったことではなく、エレミヤの口によって約束されたこと（エレミヤ書29:10）を成就するために、主がキュロス王の心を動かして行わせたことです。歴史を導いておられるのは主なのです。

キュロス王は、布告の中で次のように言っています（エズラ1:2-3、歴代誌下36:23）。「天にいます神」「この主がユダのエルサレムに御自分の神殿を建ててをわたしに命じられた。」「神が共にいてくださるように。」と。この箇所を読むと、キュロス王もイスラエルの民と同じ神を信じているようにも思えますが、実際は、バビロニアの神マルドゥクを信じていました。しかし、他の宗教についても否定せず、受け入れていたのです。

旧約聖書の時代は、戦争に負けるのは、その国の神が相手の国の神に敗北したと考えられていました。つまり、バビロン捕囚は、イスラエルの神である主が、バビロニアの神マルドゥクに敗北したということでした。しかし、主は敗北などせず、生きておられ、約束を成就されたのです。

なぜ、バビロン捕囚が行われたかという点、ユダヤの人々が罪を犯したからです。神さまは預言者を通して、悔い改めるよう、何度も語りかけましたが、ユダヤの人々は聞き入れませんでした。そこで、紀元前586年、神さまは、バビロニア人にエルサレムを破壊させ、神の民を強制的に移住させました。異邦人を通してバビロン捕囚を行ったのです。しかし、神さまのご計画はそこで終わりではありませんでした。エルサレムの回復をも約束しておられたのです（イザヤ44:28-45:1）。そして、再び異邦人を通して、エルサレムへの帰還、神殿の再建を実現させました。

異邦人を通して、バビロンに連れていき、再び、異邦人を通してエルサレムに戻す神さまの大きな計画に驚くばかりです。

キュロス王の布告を聞いて、ユダヤの人々はどのように感じたのでしょうか。バビロニアに連れてこられた当初はイスラエルに帰りたいたいと思っていた民も、何年、何十年とたつうちに、新しい土地での暮らしにも慣れ、もうイスラエルに戻らなくてもよいと思うようになっていたかもしれません。歳を取って戻ることをあきらめた人もいるでしょう。バビロニアで生まれた世代にとっては、「帰る」というより「行く」所であり、新しい土地へ行くのは不安だったのではないのでしょうか？

一方で、ダニエルは日に三度エルサレムの方を向いて次のように祈っていました。

「捕虜にされている敵地で、心を尽くし、魂を尽くしてあなたに立ち帰り、あなたが先祖にお与えになった地、あなたがお選びになった都、御名のためにわたしが建てた神殿の方に向かってあなたに祈るなら、あ

あなたはお住まいである天にいましてその祈りと願いに耳を傾け、裁きを行ってください。あなたの民があなたに対して犯した罪、あなたに対する反逆の罪の全てを赦し、彼らを捕えた者たちの前で、彼らに憐れみを施し、その人々が彼らを憐れむようにしてください。」（列王記上 8:48-50）

エルサレムを忘れてしまっていた者に対しても、一時も忘れず、祈り続けた者に対しても、神さまは同じように「主の民に属する者は誰でも」と呼びかけます。心が神さまから離れてしまっても、決して見捨てず、心に働きかけて呼び戻してくださるお方です。

しかも、単に帰国するだけでなく、主の神殿を建てるための帰国であり、ネブカドネツアルが主の神殿から出させて、自分の神々の宮に納めた祭具類もすべて取り出して持たせてくださったのです。

バビロンでも主を礼拝することは許されていましたが、神殿はありませんでした。私たちには、神さまから与えられた立派な礼拝堂があります。もちろん、礼拝堂がなくても、どこでも礼拝はできます。しかし、それが何十年と続いたらどうでしょう。同じ信仰を持ち続けられるのでしょうか？教会に用事のある業者さんや通りがかりの方などが、「礼拝堂の中に入っていいですか？」と言って、中に入られることがあります。皆さん、「やはり礼拝堂の中は、神聖な、厳かな空気が漂っていますね。」「心が落ち着きますね。」とおっしゃいます。神殿を建て上げ、以前使っていた祭具類を使ってささげる礼拝はどれほど喜びに満ちたものとなるか、想像に難くありません。

現代の私たちが置かれている状況は、この時代ととても似ていると思います。コロナ禍になって2年半、教会に来ることができない時が続き、それぞれが家庭で、ライブ配信、DVDやCD、あるいは、週報を読んで礼拝するようになりました。一日も早く礼拝堂で礼拝したいと日々祈り続けた方、コロナ後もオンライン礼拝を選び取ろうと思っている方、この2年半の間に体調を崩すなどして、教会に出向くことが難しくなった方、礼拝堂にたくさんの方が集って、皆で高らかに賛美することを体験したことのない方……

科学の発達と献身的なご奉仕により、どこにいても、いつでも、スマホやパソコンがあれば礼拝できる時代となりました。それは喜ばしいことではありますが、礼拝堂に集まり、兄弟姉妹を近くに感じながらささげる礼拝は何物にも代えがたいものではないでしょうか？ 私たちが何を選び取ったとしても、神さまは私たちを愛してくださいます。その愛に応えるために、コロナが収束し、自由に教会に集まれるようになった時、その神さまからの呼びかけにどのように答えていくべきか、問われているように思います。

## ● 分かち合い

- ・ 新しいことに挑戦するとき、神さまが背中を押してくださったと感じたことはありますか？
- ・ 神さまの時があることはわかっているけど、待つことが難しいときがありますね。そのような時、どのようにして乗り越えますか？